

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02190

研究課題名(和文) ラッセルの中性的一元論の現代性

研究課題名(英文) The Actuality of Russell's Neutral Monism

研究代表者

高村 夏輝 (Takamura, Natsuki)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：60759801

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：パートランド・ラッセルの中性的一元論の再評価を目指して、ラッセルやウィトゲンシュタインのテキストと、いわゆる「ラッセル的一元論」の諸立場を検討した。その結果、ラッセルの哲学的見解が、現代哲学に寄与する可能性を認めることができた。ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』はラッセルの「不完全記号」というアイデアに基づくものだと解釈できる。そこでの表象関係の説明を、中性的一元論での意味論の解明へと援用することが可能だと思われる。また、ラッセル的一元論には「結合問題」というよく知られた困難があるが、その問題の解決策として、パースペクティブに関するラッセルの見解を用いることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラッセルの中性的一元論は、現在ではラッセル的一元論という立場として様々な論者に継承されている。このラッセル的一元論は、意識についての哲学的難問として知られる、現象的意識の問題に対する解決策として注目を集めている。

ラッセル的一元論は現象的意識が物理的性質に還元不可能な独自の性質であるとしつつ、全体としては自然主義的な世界観を保持している。それゆえ、たとえば人工知能に現象的意識を持たせる道を開く可能性を持つ。

本研究では、そうした可能性を持つ中性的一元論、ラッセル的一元論にまつわる難問を解消し、その意識の理論としての説得力を高めることができた。

研究成果の概要(英文)：In order to reevaluate Bertrand Russell's neutral monism, I examined texts by Russell, Wittgenstein and Russellian monists. As a result, I was able to recognize the potential of Russell's philosophical views to contribute to contemporary philosophy.

Wittgenstein's "Tractatus" can be interpreted as being based on Russell's idea of the "incomplete symbols". Therefore, it seems possible to apply Tractatus's explanation of representational relations to the clarification of semantics in neutral monism. In addition, Russell's view on perspective can be used as a solution to the well-known difficulty of the "binding problem" in Russellian monism.

研究分野：哲学

キーワード：中性的一元論 現象的意識 ラッセル的一元論 物理主義 汎心論 汎質論 ラッセル ウィトゲンシュタイン

1. 研究開始当初の背景

バートランド・ラッセルは20世紀から現在に至る英語圏の哲学、分析哲学の創始者とされる哲学者であり、けっして軽んじられているわけではないが、その仕事のすべてが注目を集めているわけではない。20世紀の中ごろからは、その初期、1903年から1918年までの論理的・言語的考察にしか注目されなくなった。その理由は、主に20世紀の分析哲学が言語的意味の分析を哲学的考察の入り口としていたことにある。

意味分析はアプリアリな手続き(概念分析)によって行われると想定される。ラッセルはけっして哲学的分析がアプリアリになされるとは考えていなかったが、初期の仕事は、概念分析に従事する哲学者たちが利用できるものでもあった。しかしラッセルの知覚論や心の哲学(センスデータ論やパーセプト論)に対しては、ウィトゲンシュタインやセラーズといった哲学者たちからの強力な批判もあって関心を集めなくなり、初期の仕事に関しては、最終的には論理的・言語的考察に対する注目だけが残った。

また1918年に大きく立場を変え、中性的一元論を採用したラッセルは、自然主義的立場を鮮明にした。心理学や物理学といった経験科学を分析の対象とし、そして論理学や言語に関する議論はほとんどしなくなった。そのため、この時期のラッセルの仕事は、当時から概念分析というアプローチを採用する哲学者たちから関心を向けられることは少なかった。

現在、英語圏の哲学では分析哲学史の研究が盛んにおこなわれるようになり、その中でラッセルも研究対象とされるが、そこで関心が寄せられるのも『プリンキピア・マテマティカ』を頂点とする論理哲学・数理哲学がほとんどであった。

私自身の研究としては、これまで、1903年から1918年までのラッセルのセンスデータ論を研究し、博士論文と著書『ラッセルの哲学 [1903-1918] センスデータ論の破壊と再生』において、それが現在でも哲学的世界観として評価しうるものであることを明らかにした。この点でラッセル哲学研究の空白の一部を埋めることができた。しかしそれもやはり1918年までのラッセルの見解であって、1919年以降のテキストに関しては手つかずになってしまっていた。

しかし20世紀末ごろから、分析哲学者が様々な問題に対してとるアプローチが概念分析から自然主義へと変化してきた。哲学の問題はアプリアリに解決されるべきという前提が問い直され、自然科学的知見に基づいて分析がなされたり、哲学的議論や主張の妥当性が再検討されることが多くなってきた。こうしたアプローチは、1919年以降の、中性的一元論期のラッセルが採用していたものでもある。こうした状況の変化を通じて、長い間忘れられてきた中性的一元論期のラッセルの主張に関心を持つ研究者も少しずつ増加し、それらを再評価すべき機運が高まってきていると言える。

研究開始時の状況は概略、以上のものであった。

2. 研究の目的

本研究は、以上のように再評価の機運が高まっているにもかかわらず、検討されることがそれほど多いとは言えない中性的一元論期のラッセルの見解を研究し、それが現在論じられている様々な哲学的問題に対してどのような解決策を示唆しうるかを明らかにしようとするものである。

中性的一元論期のラッセルの見解が、これまで注目されてきた1918年までの見解と大きく異なる点は、面識という心的作用を認めないことである。1918年までのラッセルは、意識の対象が外的世界に実在するセンスデータであるとし、実在の認識は主観とセンスデータの間に面識という心的関係が成立することに基づくとしていた。認識の対象であるセンスデータと心的作用である面識という異なる二種の存在者が認められ、センスデータから面識に基づく判断作用によって構成されたものとして、様々な心的状態を理解していた。かくして当時のラッセルの世界観は、実在の構成要素であるセンスデータと、心的作用である面識および構成された心的状態からなる二元論になる。

これに対し、中性的一元論期のラッセルは面識という心的作用を認めず、面識の対象となる要素のみを実在するものとする(その結果、「センスデータ」ではなく「パーセプト」と呼ばれることになる)。そして面識関係によって説明されていた、心的状態と実在との区別、および主体が実在を表象するという事態を、パーセプト間の因果関係で解明しようとする。たとえば実在する物体と心的状態の区別は、センスデータ論においては、物体が物理的性質としての関係によってセンスデータが結合したものであるのに対し、心的状態が面識という作用を含むものとされていた。一方中性的一元論期では、パーセプト間の物理的関係による結合が物体であり、心理的関係による結合が心的状態であるとされる。そして心的状態の一種として、様々な表象状態が説明されることになる。

そこで検討すべきは、こうした中性的一元論期のラッセルの見解が、心身の区別や表象についての理論として説得力を持つのか、それらの論点に関して現在なされている議論と比較して、どのような長所を持つのかを明らかにすることである。これが本研究課題の目的である。

3. 研究の方法

研究の方法は、中性的一元論期のラッセルの著作に加え、当時のラッセルに大きな影響を与えたウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』（以下、『論考』と略）を一次文献、ラッセルの中性的一元論および『論考』に関する研究論文、および「ラッセル的一元論」を代表とする中性的一元論に影響を受けた現代の議論を二次文献として調査することである。一次文献から、当時のラッセルの見解がいかなるものであったかを明らかにし、二次文献から、現在の議論状況や、どのような問いに答えることが求められているかを明らかにすることができる。そしてこの二つを突き合わせることで、中性的一元論が現在の哲学的議論に対してどのような寄与を果たせるのかが明確になる。

（一次文献の調査として、当初はカナダのマクマスター大学にあるラッセル・アーカイヴに所蔵されている遺稿の調査も行う予定であったが、勤務先の事情とコロナウイルスの世界的流行により行えなかった。）

4. 研究成果

論文「『論理哲学論考』をいかに読むか ラッセル的アプローチ」では、ウィトゲンシュタインの『論考』とラッセルの不完全記号の学説との関係を論じた。

『論考』は、ラッセル哲学に対する鋭い批判を含む著作として知られている。最も大きな争点となるのは、アприオリで必然的な知識である論理的真理の知識を、ラッセルのように「論理形式」という抽象的対象に対する面識によって説明できるか否かであった。ラッセルは1913年の『知識の理論』においてそうした説明を試みたが、それはウィトゲンシュタインから批判され、放棄されてしまった。そしてその後、ラッセル自身は論理的知識の説明を自ら試みることはなかった。

ウィトゲンシュタインの『論考』は、ラッセルが描定した面識という心的作用や論理形式という対象を認めることなく、論理的真理のアприオリ性と必然性を説明することを目指す著作であると言える。『論考』によれば、論理形式は思考・記号とそれが表象する事態とが共有するものであり、記号や事態と独立に存在する抽象的対象ではない。論理形式のおかげで思考・記号が実在を表象することが可能となり、またいかなる思考・記号に関しても、それに対するアприオリな制約として論理的真理が成立することになる。

ラッセルはこうした『論考』の見解が、自身の中性的一元論の世界観においても採用可能であると考えていたと思われる。『論考』における思考・記号と事態との論理形式の共有が、中性的一元論では構造上の一致によって成立する出来事間の因果関係として解釈され、表象関係の説明に援用可能だと考えていた。これはもちろん『論考』の解釈としては誤りであるが、そこで示されている主張を別の立場から利用するものとして理解するならば、肯定的に捉えることができる。

この論文では、このような中性的一元論に対する『論考』の影響を踏まえ、『論考』がラッセル自身の論理哲学との近さを明らかにすることを試みた。具体的に言えば、本論文では『論考』は、ラッセルの「不完全記号の学説」を徹底化することにより、論理形式と面識を用いずに表象関係と論理的真理の知識を説明するものであることを示した。このように『論考』を解釈することにより、中性的一元論期のラッセルは論理形式と面識関係を退けたが、しかし1918年以前の自身の論理哲学の延長上にあるものとして表象関係を説明していたと言えるようになる。

「ラッセル的一元論としての素朴実在論」

ラッセルの中性的一元論は、現在、現象的意識の問題を解決する有力なアイデアを含むものとして注目されている。すなわち、我々の現象的意識が含む質的特徴は出来事の内在的性質であるが、物理科学は実在する出来事の構造的・関係的性質しか明らかにしないというアイデアである。このアイデアは、現在の二元論者が主張するように、物理科学的知識が質的側面に関する知識を含意しないことを認めながらも、質的特徴と物理的性質は同じ出来事の内在的性質と構造的・関係的性質として組み合わせることができ、一元論の世界観を採ることを可能にする。

こうした見解を利用して現象的意識の問題を解決しようとする立場を「ラッセル的一元論」と呼ぶ。ラッセル的一元論は、物理的出来事のない愛的性質をどのような性質と見なすかによって三つの立場に区別される。一つは、それを心的性質である質的特徴とする立場であり、これはありとあらゆる出来事に心的性質が備わるとすることになるので、一種の汎心論になる。次に、物理的出来事の内在的性質もまた、何らかの意味で物理的性質であると認められ、現象的意識の質的特徴はそれに付随するとする立場があり、これは「ラッセル的物理主義」と呼ばれる。最後に、内在的性質は質的特徴であるが、しかし質は心的性質ではないとする立場があり、「汎質論」と呼ばれる。

以上の三つの「ラッセル的一元論」には「結合問題」という難問が指摘されている。結合問題とは、ミクロ物理的出来事間の結合関係によっていかにしてマクロな現象的意識の質的特徴が構成されるのか、という問題である。三つの立場のうちでは汎質論が最も有望であるが、これに対しても、構造についての結合問題が難問として立ちふさがる。

ラッセルの中性的一元論は、自我という対象や面識という心的作用を認めない点で汎心論と

異なり、ミクロ物理的出来事にも質的特徴を認める点でラッセル的物理主義とも異なる。三つの立場の中では汎質論に近い。そこで汎質論にとっての難問である構造についての結合問題を解決することができれば、ラッセルの中性的一元論が現象的意識の問題解決に大きく寄与することが示されることになる。本論文では、センスデータ論期のラッセルが支持していた、「パースペクティブ/パースペクティブ空間」の区別を利用し、現象的意識の質的特徴を外界であるパースペクティブ内に位置づけることにより、構造についての結合問題を解決することができるとした。

ただしこの場合、外界、実在する空間領域であるパースペクティブ内に定位される質的特徴が意識されるのはどのような場合かについての議論を必要とする。これはラッセルが『論考』から受け取った、構造を共有することによる因果関係に基づく表象関係の説明によって答えることができると思われるが、本論文では具体化することができず、今後の課題とすることになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高村夏輝	4. 巻 第45号
2. 論文標題 「『論理哲学論考』をどう読むか ラッセル的アプローチ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『哲学の探求』	6. 最初と最後の頁 2-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高村夏輝	4. 巻 15
2. 論文標題 ラッセル的一元論としての素朴実在論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nagoya Journal of Philosophy	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagjp.15.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高村夏輝
2. 発表標題 現代汎心論とラッセル
3. 学会等名 ワークショップ 汎心論を再起動する ラッセル・ベルグソン・ホワイトヘッド
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高村夏輝
2. 発表標題 素朴実在論としてのラッセル的一元論
3. 学会等名 応用哲学会第11回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高村夏輝
2. 発表標題 「過激なラッセル主義」としての『論理哲学論考』
3. 学会等名 哲学若手哲学研究者フォーラム テーマレクチャー（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関